

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2013～2017

課題番号：25300045

研究課題名(和文) 熱帯原生林の狩猟採集民と農耕民の共生に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Inter-Ethnic Communication in a Symbiotic Society in Primary Tropical Forests in Borneo

研究代表者

金沢 謙太郎 (Kanazawa, Kentaro)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号：70340924

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、狩猟採集民ブナン人と農耕民クラビット人の共生関係を、マレーシアのサラワク州のパラム河上流域(ウルパラム)を対象に、熱帯原生林をめぐる両者のコミュニケーション過程という分析視座から追究した。調査対象集落では、他の農耕民集落では稀な狩猟採集民と農耕民間の通婚が行われている。この地ではクラビット人男性とブナン人女性の婚姻だけでなく、ブナン人男性とクラビット人女性の婚姻の事例が認められる。また、クラビット人とブナン人は幼いころから教会や小学校で同席し、交流や親睦を重ねている。両者は政治的な立場に違いは見られるものの、互いの意向を尊重しつつ、開発アクターによって分断されることを防いできた。

研究成果の概要(英文)：This study examined the symbiotic relationship between hunter-gatherers and farming neighbors from the analytical viewpoint of the communication process going around the primary tropical forests in Borneo. In the state of Sarawak, Malaysia commercial logging has already reached the deepest parts near the border. Nevertheless, there is one area where the primary forest remains unlogged in the Upper Baram Basin. In a village surveyed, marriages between different ethnic groups were common. Not only marriages of male farmers and female hunter-gatherers, but also cases of marriage of male hunter-gatherers and female farmers were observed. The hunter-gatherers and farming neighbors have been present at church and primary school and piled up fellowship since childhood. Although the difference was observed in political positions between the two, they respected each other's intentions while preventing them from being separated by development actors.

研究分野：環境人類学

キーワード：文化人類学 民族学 熱帯原生林 狩猟採集民 農耕民

1. 研究開始当初の背景

熱帯雨林地域の狩猟採集民がどのように存続してきたのかという問いに対して、これまでに農耕民との共生の関係性に着目した議論が重ねられてきた。しかし、狩猟採集民は農耕民から「庇護すべき対象」あるいは「労働力」とみなされており、両者の社会的関係性は対等ではないという点が強調されてきた。

マレーシア、サラワクのバラム河上流域はウルバラム (Ulu Baram) と呼ばれる。ウルは上流、奥地を意味する。ウルバラムのスルンゴ川 (Selungo) 周辺は、国立公園などの自然保護区以外で唯一まとまった原生林が残っている地域である。その他のサラワクの保護区外の原生林はほぼすべて商業伐採し尽くされてきた。この森に住み、森を守ってきたのはプナン人 (Penan) である。スルンゴ川地域には、プナン人のほかに農耕民クラビット人 (Kelabit) の村が存在する。ポルネオの様々な地域で、農耕民がプナン人を見下したような発言をしたり、プナン人が農耕民に遠慮した態度をとったりする様子を目の当たりにしてきた。しかし、スルンゴ川地域のプナン人の振舞いは、他の地域のプナン人のそれとは対照的であった。プナン人とクラビット人は気の置けない間柄という感じで実にのびのびと話しをしている。そこでは、単に食糧や労働力の交換という即時的な利益を得るための関係というモデルでは捉えきれない民族間のコミュニケーションが行われている。

2. 研究の目的

商業伐採に日々対峙しながら生活していくためには、開発アクターによる分断を防ぐ必要がある。本研究では、ウルバラムにおいて原生林が守られてきた要因として、プナン人とクラビット人の良好な関係性が重要な役割を果たしているのではないかと、という仮説を立てた。隣接集落を含む地域全体で原生林を守ってきたのだとすれば、2つの民族は日常的にどのように意思疎通をはかり、良好な関係性を築いてきたのかを検証する必要がある。

そこで本研究は、熱帯原生林をめぐる狩猟採集民と農耕民のコミュニケーション過程を文化、歴史、政治という3つの分析視角から捉え返していく。なお、ここでいう共生とは、本来異なった生き方をしている人間集団が互いに関係し合いながら生きている現象を指す。

3. 研究の方法

ウルバラムにおいて広域踏査を行うとともに、ロング・クパン村 (Long Kepang) とロング・ラン村 (Long Lellang) で集中的な参与観察や聞きとり、映像記録を行った。ロング・クパン村は狩猟採集を主な生業とするプナン人の集落、ロング・ラン村は農耕

を主な生業とするクラビット人の集落である。村長などを通じてそれぞれの村の家庭に居候させてもらい、普段の生活にできるだけ近い状態を観察した。聞きとりについては、あらかじめ用意した質問とともに被調査者の回答に応じて、質問を追加したり、順序を変更したりしながら進める半構造化インタビュー (semi-structured interview) を行った。また、プナン人とクラビット人のコミュニケーションを映像によって記録することで、精度の高いデータを収集した。

調査地までのアクセスについては、海岸部の町、ミリから週3便出ているロング・ラン行き的小型プロペラ飛行機を利用した。所要時間は約1時間である。陸路で向かうとほぼ1日がかかりであるから、航空路の利便性は非常に高い。ロング・ランから周辺の各プナン人集落までは、徒歩で数時間から1日程度を要する距離にある。なお、ウルバラムには20弱のプナン人集落が点在し、合わせておよそ400家族、1,800人が暮らしている。

4. 研究成果

(1) 文化

調査対象地域のプナン人とクラビット人は、それぞれ自律的な生計手段をもち、現在の暮らしには総じて満足している。ともに清らかな環境下で、プナン人は狩猟採集と焼畑耕作を営み、クラビット人は水田と焼畑の耕作を営む。クラビット人は原生林に生きるプナン人の狩猟採集のスキルや手先の器用さを認めている。

ロング・ラン村には近隣のプナン人が獣肉や山菜などを売りに来る。籐製の背負い籠で数キロの塊肉などが運び込まれる。プナン人はクラビット人宅に上がって、階段などに腰をかける。長椅子などに相席しながら、話をする場合もある。イノシシ肉が売買される場合、クラビット人が台秤で重さを計測した後、その場で代金を支払う。その際、クラビット人はプナン人の労をねぎらうのに対して、プナン人は特にお礼も言わず、当然という態度で代金を受け取る。両者の会話では専らプナン語が使用されている。プナン人のこのような態度を、クラビット人は咎めたりせず当たり前のこととして受け入れている。こうしたコミュニケーションにおいては、大人と子どものような関係性である。その一方で、プナン人は農耕民と比べて小柄であるが、体力や俊敏さの点で秀でているとクラビット人も一瞥している。

ロング・ラン村においては、聞き取りを行った全世帯にプナン人を含む異民族間結婚 (inter-ethnic marriage) が見られることが明らかになった。例えば、ある世帯では、夫がプナン人男性 (父プナン人、母クラビット人) で妻はクニヤ人 (Kenyah) に近いモレ人 (Morek) という集団出身の女性である。ロング・ラマ (Long Lama) の中学校で互いに知り合ったという。5人の子どもがいる。

このプナン人男性の父親は近隣のプナン人集落出身、母親はロング・ララン村のクラビット人であった。プナン人男性とクラビット人女性という組み合わせの初めての夫婦といわれている。そのクラビット人女性は半身不随であり、プナン人男性は結婚前からハンデをもつその女性を親身に世話していたという。そして、その様子を見ていた村の人びとも両者が一緒になることを自然に認めるようになった。子どもたちについては、末の娘以外は実家を離れている。

また、別の世帯ではクラビット人同士の夫婦とその息子世帯が同居する3世代家族である。息子の妻はプナン人村出身のプナン人女性である。息子の異民族間結婚の申し出を両親に認めてもらうまでに1~2年かかったという。周囲の人びとが反対していた両親を説得してくれた。息子夫婦の子どもたちのうち、上の2人はミリに住み、下の3人は同居している。

(2) 歴史

ロング・クバン村のプナン人によると、調査地域は元々狩猟採集民であるプナン人の居住域であったが、19世紀半ばに周辺地域から農耕民(カヤン人、クニヤ人、クラビット人など)が移り住んできた。プナン人と農耕民は、食物や土地など生存に必要な資源を利用する上で競合せず、互いに攻撃し合うことはなかった。

しかしながら、プナン人と農耕民との接触・交流がなかったわけではない。採集民であるプナン人と農耕民との間でタム(tamu)と呼ばれる物々交換の市がもたれていた。これは、プナン人と顔見知りのごく限定された近隣の農耕民集団との間で行われた。タムは1970年代の森林の商業伐採が始まるころまで続いた。年輩のプナン人たちは今でもタムに参加したことを懐かしく語ることもある。

ボルネオ島では、19世紀半ばからカトリックやプロテスタントの宣教師が布教活動を始めている。その活動によって、内陸部の先住民族の多くがキリスト教徒となった。ウルバラムのクラビット人もプナン人もともにプロテスタント系のキリスト教を信仰している。クラビット人はプナン人より早く1950年代にキリスト教をとり入れた。その後、森で暮らすプナン人への教化にはクラビット人の辛抱強い働きかけがあった。現在でもクラビット人集落でのキリスト教関連の行事にプナン人が招待されることがある。

ロング・ララン村には小学校が設置されている。教員は州政府から派遣され、校舎はクラビット人によって管理されている。クラビット人生徒は少数で、大半の生徒は寄宿舎に入っているプナン人である。プナン人生徒は近隣の村々から100人以上集まっている。クラビット人生徒とプナン人生徒は机を並べて学んでいる。彼らは卒業後も互いに友人を意味するスピラ(sebila)と呼び合っている。

(3) 政治

森林はたとえ州有であっても、州が直接に森林開発を行なうわけではない。森林開発を行なう場合、州政府は民間企業に一定区画の森林の伐採権(concession)を貸与して開発をまかせ、その出材量に応じて、ロイヤルティや各種賦課金などを徴収する方式をとっている。サラワクから伐り出された木材は、林道(木材運搬用の道路)を通じて製材工場へと運ばれ、主に日本へ輸出されてきた。

マレーシアでは伐採権所有者の大半はマレー系の政治家やその親戚が占めている。サラワク州でも同様に、1981年から2014年までの33年間、州首相の座にあったアブドゥール・タイプ・マフムド(Abdul Taib Mahmud)の一族が筆頭にくる。タイプ一族は熱帯材輸出の独占体制を築き、日本への木材輸出の許認可を与えた。その代わり、日本の木材輸入に関係する企業は香港のペーパー・カンパニーにリベートを支払ってきた。リベート資金はペーパー・カンパニーから投資企業に振替えられて、北米の不動産購入の融資に充てられた。投資企業はタイプ一族によって秘密裏に管理されていた。

2014年にタイプは突如首相を辞任した。理由は明らかになっていないが、上記の不法資金の流れが明らかになったことも一因とされる。新首相のアデナン・サテム(Adenan Satem)は、就任直後にサムリン社(Samling)を含むサラワク州の木材大手6社に対し警告を発した。許可地域外の違法伐採に関与しているとの理由からである。また、違法伐採が改善されるまで伐採ライセンスの新規発行の停止も発表した。サムリン社はサラワクで最大規模の160万haの伐採権を保有する木材企業である。1990年代からサムリン社はウルバラムでもたびたび商業伐採を仕掛けてきた。しかし、その都度、プナン人たちは団結して林道封鎖などによって森を守ってきた。

ロング・ララン村のクラビット人は商業伐採を推進してきた与党の支持者がほとんどを占める。プナン人たちは概ね野党支持である。クラビット人たちは交通路の整備や空港や学校、診療所の維持を望んでいる。ミリとの陸路を結ぶ林道は1990年代に開設されたが、2002年までに使われなくなっていた。2015年に政府が太陽光発電のプロジェクトを導入した際に、再び林道が開通した。さらに、ロング・ララン村では、近隣のプロン・タウ(Pulong Tau)国立公園の観光開発を望む声もある。同村内の会合はパカルー

(Pakareuh)と呼ばれ、3ヶ月に1度開催されている。来客への対応や行事の準備などが話題の中心であり、プナン人の代表者との公式な話し合いなどは行われていない。しかし、政府は林道建設やコミュニティ開発についてプナン人の関与を求めることがある。クラビット人はそのメッセージをプナン人に伝

えるが、プナン人はそれを聞き流す。なぜなら、プナン人たちは政府の提案は木材企業の商業伐採と連動していると捉えているからだ。それに対して、クラビット人は「プナン人の問題だから」と必要以上に追及しない。プナン人とクラビット人は政治的な立場に違いはあるものの、互いの意向を尊重しつつ、開発アクターによって分断されることを防いできた。対等な共生の実践には困難が伴うが、彼らは時間をかけてそれらを克服してきた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9件)

金沢謙太郎, 「コモンズとコミュニティの悲劇: 熱帯雨林の林産物採集をめぐる」, 千葉大学教育学部社会学研究室『環境社会学研究別冊 3』, 査読無, 3, 13-22, 2018年.

分藤大翼, 「フィールドについて」, 『場所、芸術、意識 明治大学 総合芸術系創設記念論集』, 査読無, 1, 72-73, 2018年.

Kentaro Kanazawa, Sedentarization and Nomadism among the Penan of Sarawak, *Senri Ethnological Studies*, 査読有, 95, 319-334, 2017, doi/10.15021/00008589

金沢謙太郎, 「熱帯雨林の英雄か国家の敵か: ブルーノ・マンサーとプナン人の闘い」, 『マレーシア研究』, 査読有, 6, 86-97, 2017年,

[http://jams92.org/pdf/MSJ06/msj06\(086\)_kanazawa.pdf](http://jams92.org/pdf/MSJ06/msj06(086)_kanazawa.pdf)

佐久間香子, 「サラワク人類学の系譜と今日的課題」, 『マレーシア研究』, 査読有, 6, 21-42, 2017年,

[http://jams92.org/pdf/MSJ06/msj06\(021\)_sakuma.pdf](http://jams92.org/pdf/MSJ06/msj06(021)_sakuma.pdf)

金沢謙太郎・分藤大翼・小泉都・佐久間香子, 「熱帯原生林の共生社会論 ボルネオの原生林を守る民族間コミュニケーション」, 『信州大学総合人間科学研究』, 査読有, 11, 19-34, 2017年,

<http://hdl.handle.net/10091/00019556>

Kentaro Kanazawa, Sustainable Harvesting and Conservation of Agarwood: A Case Study from the Upper Baram River in Sarawak, Malaysia, *Tropics*, 査読有, 25(4), 139-146, 2017, doi.org/10.3759/tropics.MS15-16

佐久間香子, 「ボルネオ内陸部の交易拠点としてのロングハウス: 19世紀末のサラワクにおける河川交易からの考察」, 『東南アジア研究』, 査読有, 54(2), 153-181, 2017年, doi.org/10.20495/tak.54.2_153

分藤大翼, 「民族誌映画の『創造的劇化』」, 『月刊みんぱく』, 査読無, 216, 9, 2016年, http://www.minpaku.ac.jp/sites/default/files/museum/showcase/bookbite/gekkan/MP1612_02-09HP.pdf

〔学会発表〕(計 12件)

Kentaro Kanazawa, The tragedy of agarwood: Forest products and communities in Borneo, Biennial Conference of the Borneo Research Council, 2018.

Kentaro Kanazawa, What protects the primary tropical forest of the Upper Baram River in Sarawak?: Networking, resistance, the Penan, 12th Conference on Hunting and Gathering Societies, 2018.

Kentaro Kanazawa, Environmental injustice and social interrelationship: Examples from illegal logging issues of tropical timber, XIX ISA World Congress of International Sociological Association, 2018.

佐久間香子, 「マレーシアの都市開発と先住民」, 大阪府立三国丘高校スーパーグローバルハイスクール 多様な考え - グローバルな場でのコミュニケーションのために ~ 映像から東南アジアの現状を学ぶ ~, 2018年.

佐久間香子, 「チャイニーズ・ドリームの光と影 中国におけるアフリカ系コミュニティの形成と交易へのコメント」, 立命館大学国際言語文化研究所連続講座「越境する民 接触/排除」, 2017年.

金沢謙太郎・分藤大翼・小泉都・佐久間香子, 「熱帯原生林の共生社会論 ボルネオの原生林を守る民族間コミュニケーション」, 日本熱帯生態学会第26回年次大会, 2016年.

金沢謙太郎, 「多様性と正義」, 2016年度日本マレーシア学会(JAMS)研究大会シンポジウム, 2016年.

佐久間香子, 「サラワクの河川交易」, 2016年度日本マレーシア学会(JAMS)研究大会シンポジウム, 2016年.

分藤大翼, 「森の狩猟民と動物のいのち」, 第21回 ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会, 2015年.

Kentaro Kanazawa, Sedentarization and Nomadism: The Political Ecology of the Hunter-gatherers in Sarawak, Inter-Congress of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2014.

Daisuke Bundo, jo joko: New horizon of anthropological films from Japan (Film-screening program), Inter-Congress of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2014.

金沢謙太郎, 「だれが原生林をまもっているのか - サラワク、バラム河上流域の事例から -」, 日本熱帯生態学会第23回年次大会, 2013年.

〔図書〕(計 9件)

金沢謙太郎, 「採集」, 『東南アジア文化事典』, 2頁(印刷中), 丸善出版, 2018年.

分藤大翼, 「音と身体」, 『Lexicon 現代人類学』, 以文社, 4頁, 2018年.

小泉都, 「森林環境問題と住民の森林観 - なぜブナンは森林を守るのか」, 『森林科学シリーズ 第12巻 森林と文化 - 森とともに生きる民俗知』, 共立出版, 印刷中, 2018年.

金沢謙太郎, 「東南アジア島嶼部における狩猟採集民と農耕民との関係」, 『狩猟採集民からみた地球環境史』, 東京大学出版会, 112-127, 2017年.

小泉都, 「ボルネオの狩猟採集民の祖先は『狩猟採集民』か『農耕民』か」, 『狩猟採集民からみた地球環境史』, 東京大学出版会, 88-94, 2017年.

小泉都, 「人類を支えてきた狩猟採集」, 『東南アジア地域研究入門1環境』, 慶應義塾大学出版会, 71-90, 2017年.

小泉都, 「森林の保全と住民の生活をつなぐ - ボルネオ熱帯雨林と先住」, 『森をめぐるコンソナンスとディソナンス 熱帯森林帯地域社会の比較研究』, 京都大学地域研究統合情報センター, 25-30, 2016年.

金沢謙太郎, 「平和の森 - 先住民族ブナンのイニシアティブ」, 『社会的共通資本としての森』, 東京大学出版会, 193-212, 2015年.

分藤大翼・村尾静二・川瀬慈, 『フィールド映像術』, 古今書院, 210頁, 2015年.

6. 研究組織

(1)研究代表者

金沢 謙太郎 (KANAZAWA Kentaro)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号: 70340924

(2)研究分担者

分藤 大翼 (Bundo Daisuke)

信州大学・学術研究院総合人間科学系・准教授

研究者番号: 70397579

小泉 都 (Koizumi Miyako)

京都大学・総合博物館・学術振興会特別研究員

研究者番号: 00506884

(3)連携研究者

佐久間 香子 (Sakuma Kyoko)

立命館大学・衣笠総合研究機構・専門研究員

研究者番号: 50759321